



Weekly Report

2015-16
第5号

RI 会長テーマ Be a gift to the world クラブ会長テーマ もう一度青春！地域のために あと世代のために そして…

第 2242 回例会

日 時 : 平成 27 年 8 月 19 日

会 場 : 例会場

司 会 : SAA

稲村委員

開会点鐘

木島会長

斉 唱 : ロータリーソング「我等の生業」

お客様の紹介

木島会長

喜連 孝子様 卓話講師(喜連元昭会員の御母堂)

会長報告

木島会長

●地区 会員増強セミナーの開催

日時 9月17日(木) 15時

場所 ハイアットリージェンシー東京

出席 本間幹事・近藤会員増強副委員長

●平和フェロー第14期生オリエンテーション・歓迎パーティの開催

日時 9月5日(土) 15時

場所 学士会館

出席 伊藤(達)平和フェロシップ委員

幹事報告

本間幹事

●東京国分寺 RC 創立 50 周年記念チャリティゴルフコンペのご案内

日時 11月11日(水) 8時スタート

場所 青梅ゴルフクラブ

収益金はすべて障がい者支援・青少年の健全育成支援・震災復興支援などに寄贈予定

会員・非会員を問いません 詳細・申込は幹事まで

●くにたちアートビエンナーレ 2015 クロージング・フォーラムの開催 チケットがあります

日時 8月29日(土) 14時

場所 くにたち市民芸術小ホール

●例会変更のお知らせ 東京国分寺 RC

9月22日(火) 祝日休会

9月29日(火) 同日親睦旅行 メイク受付なし

10月6日(火) 同日芋ほり大会

10月13日(火) 10/10(土) 平兵衛まつりに振替

10月20日(火) 10/19(月) ガバナー公式訪問に振替

10月27日(火) 10/29 夜間例会 東京小金井 RC と合同

委員長報告

ニコニコBOX

秋山親睦活動委員

●木島会長 酷暑もどうやら峠を過ぎたようで大汗かきの私もホッとしております。今日は喜連孝子様の卓話、楽しみにしておりました。宜敷くお願いします。

●本間幹事 本日の卓話、喜連様、ご無理を申しまして申し訳ございません。満州よりの引き上げのお話楽しみに、また貴重なお話を拝聴させていただきます。

●小澤孝造会員・高柳会員・津戸会員・高世会員・山口会員 喜連孝子様、本日は貴重な御体験をお話いただき、ありがとうございます。私達は戦前の生まれでして、空襲には会いましたが、喜連さんの御苦勞に比べれば恥ずかしい位です。

●五十嵐会員・杉田会員・秋廣会員・秋山会員・岡田会員 喜連会員のお母上(喜連孝子)様の卓話、楽しみにしております。

●宗村会員・吉野会員 喜連様、卓話ありがとうございます。息子ご夫婦とは仲良くいたして居ります。

●小川会員・内山会員・稲村会員 喜連会員の母、孝子様の卓話、楽しみに拝聴させていただきます。我々の想像外の経験をされたこと推察致します。健康に留意され長生きされることを祈ります。

●岡本貞雄会員 私の子どもの頃の親友が、生死の境を越えて母子で満州から引き揚げてきました。彼が成人し



RI 第 2750 地区 多摩中グループ
東京国立ロータリークラブ

会長 木島常明 幹事: 本間康彦

例会日: 毎週水曜日 例会場: 谷保天満宮社務所 2 階 東京都国立市谷保 5209 TEL: 042-576-5123

事務所: 東京都国立市谷保 5234-1 TEL: 042-575-0770 FAX: 042-572-8666

E-MAIL: kunitachi-rc@sage.ocn.ne.jp WEB: http://kunitachi-rc.com/

会報委員: 遠藤直孝・北島正典・青木 健・伊藤達弥・大庭敏也

てから、その地獄からの生還を聞き取って本にまとめた経験があります。喜連会員のお母さんも、同様の体験をされたとお聞きしました。きょうはそのお話をお聞きし、改めて平和のありがたさを実感したいと思います。

●岡本正伸会員・小澤谷守会員・山崎会員・青木会員
喜連会員のお母様の卓話、楽しみに拝聴させていただきます。

●石塚会員 新年度の最初の卓話をさせていただき喜連孝子様を迎え、満州国における歴史的な事実のお話し、楽しみにしていますので、よろしく願い致します。

●寺澤会員 本日メールBOXに[国立に誕生した大学町]という本を入れさせていただきました。国立市は箱根土地株式会社により開発され、その際に大きな働きをされた中島のぼる氏のご遺族から資料を提供いただき、まとめられた本になります。(株)サトウは地元国立の皆様

をはじめ、多くの方に支えられてお陰様で創業 65 周年を迎えることが出来、感謝の気持ちをこめて本書を発行することとなり、弊社代表より「会員の皆様にお配りするように…」とのこととございます。お荷物になりますが、お持ち帰りいただき、ご一読いただければ幸いです。

●喜連紘子会員 本日は義母が戦争体験をお話しします。皆様、宜しく願います。お義母さん、頑張ってください!!

●近藤会員・遠藤直孝会員・長嶋会員 喜連会員のお母様の卓話「引揚の記」貴重な体験談、心して拝聴させていただきます。

ニコニコBOX 合計 50,000 円 累計 298,000 円

出席報告

高柳出席奨励委員

8月19日 在籍47中 出席34名

前々回(8月5日)の出席率 97.78 %

閉会点鐘

木島会長

卓話

引揚の記

喜連 孝子氏

講師紹介

石塚プログラム委員長

喜連孝子様は大正9年1月3日生まれ(現在95歳と7か月)。昭和14年に京城師範学校を卒業後、日本のいわば植民地であった現在の北朝鮮の国境近くの旧満州に近い町に女学校の教師として赴任され、昭和15年にその地で「日本窒素株式会社」附属病院の医師であった喜連氏と結婚されました。昭和16年12月太平洋戦争に突入した中において、結婚生活も3年足らずで、夫は軍医として招集され、次男誕生の顔も見ることなく終戦間際にフィリピンミンダナオ島で戦死されました。

帰国後は、広島で小学校の教師になられて、55歳の時には広島県では最初の女性校長に就任されています。退官後は幼稚園の園長を長らく勤め、また婦人コーラス隊の指揮者などを90歳まで現役で仕事を続けて、平成6年には勲5等の叙勲を受けられています。

本日の話は、当時住んでいた町にソ連軍が侵入する直前に辛くも脱出して、辛酸を舐めながら九死に一生を得て帰国するまでの生々しい体験談をお聞かせいただきます。長男の元昭様にも補足をお願いします。

昭和20年8月9日 ソ連軍侵攻 8月11日脱出

8月11日の夜中のことでした。突然、町内会長さんが見えて「近くの海岸にソ連のパラシュート部隊が降りた!ここは襲撃されるぞ!ただちに古茂山に非難せよ!」と、殺気立った顔をして大声で触れ回って来られました。当時、私は会社が用意した家に住んでいましたが、この日は三歳を過ぎたばかりの長男と、

生後九か月の次男との三人の留守家族でした。主人は、長男の元昭が一歳を過ぎたころに始めて「ダーダ」と言葉が発したのを聞いてとても喜びましたが、それも束の間で、軍医として召集され「日本はもう戦争に負ける、自分も戻っては来られないだろうから子供たちを頼む」と言い残して、2年前には陸軍に配属されていました。

私は取るものも取りあえず大急ぎで乾パンなど食料をリュックに詰め込み、次男を前に抱いて、リュックを後ろにおぶり、そして長男を近所の奥さんが手を引いてくれて、総勢四十数名の人たちと急ぎ立てられるように真っ暗な夜の山道を歩き始めました。山道はとても険しい崖沿いにあり、うっかり足をすべらすと左側の深い谷に転落するような道でした。ソ連軍に見つからないようにするために先頭を歩く人が足元を照らす懐中電灯だけが頼りでした。途中で、近所の部長の娘さんが自分の荷物を捨ててまで長男をおぶってくれたので、「部長さんは?」と聞くと「自分は逃げるくらいならピストルで自決するからお前だけ行け、と言って父は家に残りました」とのことでした。その頃の日本男性は名誉の為には潔く命を捨てるという風潮がありました。

3時間くらい歩いて、とある温泉町にたどり着きました。しかし、そこもソ連軍が侵攻してくるので危ないということで、休む間もなくさらに奥地へ向けて再び歩くことになりました。しかしそこから目指す古茂山へは幾つもの山を越していかなければならず、私は二人の幼子を連れてそんな山越えなど出来るはずがありません。「何とかなるさ、早く、早く!」と会長さんは皆を引き立てますが、深夜の険しい山道が延々と続くことを思うと途中で足がすくんでしまい前に進めなくなりました。

単独で駅を目指し貨物列車に乗車

「どうしたら良いだろう...何とか子供の命だけは守りたい」と思いあぐねた結果、私は単独行動を取ろうと決心し、皆には黙って列から離れました。子供を身体の前後にくくりつけて、歩いてきた山道を引き返し、そこ

から更に6キロ位先にある「朱乙」という駅を目指しました。汽車は動いているかどうかは知るすべもありませんでしたが、その駅は昔から燃料の石炭の補給や給水のために必ず立ち寄る駅なので、満州方面から逃げて来る汽車が来るに違いないと考えました。私はそのことに賭けてとにかく必死で駅を目指しました。夜も明けるころ、ようやく「朱乙」の駅にたどり着きました。

ドーンという大砲の音がすぐ近くまで聞こえてお腹の底に響いています。身体全体がブルブルするようなものすごく気持ちの悪い音でした。周りには日本人は一人もおらず、駅前の道行く人は朝鮮人ばかりです。皆、血走ってうつろな眼をして、どうしてよいのか分からない様子でした。プラットホームには数百名の人がひしめいて汽車を待っていましたが汽車はお昼近くになって来ません。

私は地べたに座り込んで次男に乳を飲ませはじめましたが、ふと気づくと赤や青の囚人服を着た5~6名の囚人に取り囲まれてじっと見られていました。彼らはここから40キロほど先にある「清津」という町の刑務所から開放されたと思われ、飲まず食わずで線路伝いにここまで歩いてきたのでしょう。どす黒い顔で疲れ切って、眼だけはガラガラしていますがむしろ哀れっぽく見えました。私は、とっさにリュックから大切な焼米の袋を二つ取り出して、何気なく囚人の足元に転がすように置きました。囚人たちは犬が餌をさらうように素早くそれを拾い上げ、人目を避けて逃げるように立ち去り、遠くに行つてそれを分けあって食べて居ました。

夕方になってからようやく三両編成の貨物列車がやってきました。私は必死で乗り込み、直ぐに汽車は動きはじめました。貨車の中は立ったままギューギューのすし詰め状態で息も詰まるくらいです。長男は「下駄が落ちた一、僕の下駄！」と立ったままの大人のお尻の下あたりで泣いているし、私は次男とリュックを抱えたままどこまで行くか分からない汽車の中で身動きも取れません。このまま行けば子供たちは窒息するかもしれないとの焦燥感から、この次に汽車が止まったら下車しようと思いました。

8月13日 下車して防空壕に退避

大分経つて汽車はようやく日本海沿いの「城津」という駅で停車しました。私はそこで降りて、以前遊びに来た時の記憶をたどりながら親戚の家を訪ねました。しかしすでに避難して空っぽになっていたのも、私は庭に入りそこにあった防空壕で2日ぶりにぐっすり寝ました。翌朝、台所に水を飲みに入ると梅干しを浸けた瓶が一つだけ残っているのを見つけ、私は夢中になってその梅干しをガツガツと食べました。

「城津」では別の町から逃げてきた日本人の人たちと一緒にになりました。その人たちの話によると、歩いて逃げたグループの中には子供を途中で置き去りにせざるを得なくなり、安全な場所に着いてから再び子供を探しに行つて親子とも帰らぬ人となった人もいたとのことでした。また、ソ連軍に追いつかれ、略奪や強姦、そして

気まぐれに射殺されるなど、とても残酷な目にあつたグループもあるとのことでした。特に若い女性は頭を丸坊主にして男装して見つからないようにしていましたが、それでも見つけられて暴行され連れて行かれてしまったとのことでした。また、あるグループはソ連軍に取り囲まれて、ソ連に行きたい者は左側に、日本に帰りたい者は右側に並べといわれたそうです。その人は当然ながら日本に帰る右側の列に並ぼうとしましたが、近くで見ていた朝鮮人があれはワナだから逆だよと伝えてくれたそうです。それを聞いてわざとソ連に行く左の列に数人で並んだそうです。そうすると左の列は解放され、日本に帰りたいという右に並んだ人はそのまま連れ去られてしまったとの話も聞きました。8月13日は「城津」の町の近くにも空襲があつたため、そこにとどまり、地元の朝鮮人からわずかな食糧を購入しました。近くでは戦闘があるらしく大砲の音も聞こえて居ました。

8月14日 ソ連軍戦闘機襲来 民間列車に機銃掃射2回

翌々日8月14日の早朝に思い切つて駅に向かいました。しかし多くの列車はすでに前の日までに南に行つてしまつたと聞きました。満州にいた関東軍の高級将校の家族なども早々と避難したとのことでした。そこに期せずして家畜の運搬に使う専用の貨車が入ってきました。沢山の朝鮮人も南に逃げるために乗っていましたが、なんとか私は貨車の中央に座り込むことが出来ました。あふれた人たちは木の枠で出来た屋根に上つて、汽車は人を満載して南に向けて出発しました。

しばらく行つたところで突然バリバリ、バババと耳をつんざくすさまじい音がし、屋根の上の人が吹飛ばされるのが見えました。ソ連の戦闘機の機銃掃射です。汽車は緊急停車し、皆貨車から飛び降りて貨車の下に隠れたり、線路の脇の沼や草むらに逃げていきました。私はとっさに子供に防空頭巾をかぶせ、子供の上から覆いかぶさつて、貨車の床でじっとしていました。そして右手で左手首をギュッとつまんで、「痛い！まだ生きていますよ！まだ生きていますよ！」と大声で子供に声をかけ続けました。

すさまじい銃声がやんだあと呆然として顔を上げると貨車には誰もいません。空を見上げると太陽の光が眩しく、又、いつ貨車に乗つたのか分かりませんが、兵隊さんが一人毅然と立っていた姿が今でも印象強く目に残つて居ます。戦闘機が去つた後、近くの沼や草むらに逃げた人たちが貨車に戻ってきましたが、私のいる貨車の人数はわずか数十人に減っていました。沢山の人が貨車の外に逃げたところを逆に狙われて、撃たれてしまいました。沼の水面のあちこちに真っ赤な血が浮き上がっているのが見えました。私はそのすさまじい光景をまともに見ることが出来ず、また子供たちに見せないように子供の顔をしっかりとお腹に抱えみましました。そのためか、長男は日本に帰つてからもしばらくの間は、車のエンジンの音がすると恐怖におののいて家に逃げ込んでいました。

汽車は再び動き始めましたが、しばらくして2度目の

空襲がありました。今度は、トンネルまではそれほど遠くない場所だったので、猛スピードでトンネルに走り込みました。機関車の黒煙と火の粉が猛烈に吹き込み、目が痛くて開けられませんでした。髪の毛や洋服がところどころ火の粉で焼けていることがわかりました。汽車はあたりが暗くなるまでトンネルの中で待機し、闇夜に紛れて再び動き始めて、元山という町まで走りました。運転はここで中止となったので下車しました。

8月15日 終戦・軍用列車で脱出

この日は8月15日で、駅の周辺では朝鮮人が「万世、万世」とお祝いの声を上げているのを聞き、そこで日本が負けたことを知りました。

当時の朝鮮は日韓が併合してから30年たっており、産業の振興や教育に力を注いで居ましたので、殆どどの朝鮮人は日本語も話し日本に感謝していました。日本人はむしろ尊敬されていましたので、逃げる途中でも協力してくれる人も多く、ソ連兵に見つからなければ何ら危険はありませんでした。しかし、日本が負けたらどうなるか分からないので、駅舎の陰でなるべく見つからないように休憩し、汽車が来るのを待ちました。

次男はもう乳の出なくなった私の乳房に吸い付いたまま片時も離そうとしません。もう持っている食料はありませんでした。長男は固い焼米しか食べて居なかったので血の便が出ていて顔は真っ青です。そこで、主人が緊急の時にだけ飲むようにと言っていた小さなガラスのアンブルに入った注射液を飲ませ、何とか命をつなぎました。

終戦となって安心したせいか、ここで降りた朝鮮人はたまにきた列車に乗って再び北に戻ったり、現在の平壤（ピョンヤン）に行った人も多くいました。また、南から来る列車には沢山の朝鮮人が乗っているのも不思議に思って尋ねると、北から京城（ソウル）に逃げたが、駅に降りたら「北の人間は来るな！」と石を投げられたのですぐに引き返したとのことでした。すでに当時から北と南の朝鮮人同士で仲は良くなかったようです。言葉も北の方が語調がきつく、南の言葉とは大分異なっていました。

私は南に行く汽車が来るのを待ち続けていたところ、ようやく「京城」行きの列車が入ってきました。それは軍用列車で、客車の中は青い顔をした病人や、傷ついた傷病兵を送り返すための特別仕立ての列車のようでした。おそらく赤十字のマークや白旗が掲げられていたのでここまで来られたのだと思います。

しかし軍用列車には民間人は絶対に乗せてはもらえません。ふと列車の最後尾を見るとその車両だけは屋根の無い無蓋車で、食料や水を積んでおり、ステップのところまで兵隊が2人で警備をしていました。私は子供をそこに放り込んで、線路からステップに這い上がろうとしましたが、兵隊は「駄目だと！」と言って私の手を靴で蹴飛ばします。汽車が動き始めたので私は必死になってその足にしがみつきました。警備の兵隊はあきらめたのか、私の手を引っ張り上げて乗せてくれました。

そのあとは警備の兵隊が子供を抱いて客車に連れて行ってくれました。白い衣服の兵隊は皆子供たちに親切にしてくれて食べ物を分けたりしてくれましたが、誰ひとり満足な身体の人はいませんでした。片腕を無くした兵隊は私と話すうちに大声で泣きだし、とても可愛そうでした。そのうち他の兵隊たちも自分のことで泣きだし、最後は皆一緒に泣きました。

8月16日 京城(ソウル)到着 米軍の保護下に

そして無事に今のソウルに到着しました。その夜は兵舎を兼ねた駅の食堂の机の上に子供たちを寝かせて貰い、翌朝は麦ごはんと黒い味噌汁を戴きました。ソウルはすでにアメリカ軍が占領しており、町の警備はキチンと行われていて秩序が保たれていました。日本人の収容施設も用意されていたのでソウルで二十日間滞在しました。そこで親戚と再会しました。アメリカ兵はとても人なつこくて収容所にも遊びに来て「はやく無事に日本に帰れよ」などと言ってくれました。ようやく体力も回復したので汽車で釜山に向かいました。

9月上旬 引揚船に乗船直前 長男失踪

釜山で引揚船を待つ日本人は10数棟の建物に分かれて収容されました。そして到着順に毎日建物を移動しながら整然と船に乗るのを待っていました。約10日間ほど順番を待って、今日は乗船という予定時刻の2時間前になって、突然、長男の姿が消えてしまいました。私は子供がさらわれたと思い頭の中が真っ白になりました。必死で探し回り、警備のアメリカ兵も一緒に探したりしてくれましたが見つかりません。

アメリカ兵は私を両脇から抱えながら口笛を吹きながら歩くので遊び半分です。私は次男を親戚に託し、長男を探すために朝鮮に残る覚悟を固めました。ところが、出航の直前になって、遠くの岸壁に腰かけてぼんやり海を見つめている長男を次の乗船待ちの方が見つけてくれ、世話係りまで連れて来てくれたので、間一髪で乗船することが出来ました。

門司港に到着・島根の実家から広島へ

ようやく九州の門司港に無事に到着出来ました。すでに秋の気配でした。帰国後は島根県の夫の実家に落ちついてしばらく滞在しました。そこにいた時に政府からの知らせが来て、主人は引き揚げの2か月前にすでに戦死していたことをその時初めて知りました。私はそれから2年後に広島で小学校の教師となりました。

広島は原爆投下からすでに6年たって復興しつつありましたが、昔の友人の多くは原爆で亡くなって居ました。また、生き残った人でも顔の半分がケロイドになったり、放射線を大量に浴びて白血病で苦しんでおられる方など、私よりもっと悲惨な目にあった方が大勢おられました。

私は運よく生きて帰ることが出来ましたが、沢山の罪もない人々が無駄に命を落としたこのような戦争は2度とあってはならないと痛切に思いました。

亡くなられた数多くの方のご冥福を祈り私の体験談を終わります。ご清聴ありがとうございました。